ＲＭＰ（改訂管理方式）の概要

令和元年７月
水　　産　　庁

【ポイント】

１　ＲＭＰ（改訂管理方式）は、ひげ鯨類の捕獲可能量を計算するための計算式を含む手続きを定めたもの。1992 年にＩＷＣ科学委員会で開発され、1994 年にＩＷＣ総会で採択。

２　ＲＭＰの本質は、100 年間資源に悪影響を与えない科学的・保守的な捕獲可能量の算出とシミュレーション。

（１）ＲＭＰで算出される捕獲可能量は、推定資源量の１%以下。
　日本沿岸の他の水産資源に適用される算出方法の場合、漁獲可能量は推定資源量の３～30%程度。

（２）資源量が初期資源量の 54%を上回っている場合にのみ、捕獲可能量の算出が可能。
※ 初期資源量：捕獲開始前の資源量

（３）一般的な商業漁業の対象魚種にＲＭＰを適用すると、ほとんどの魚種において漁獲可能量はゼロ。

（４）100 年の間に、捕獲以外に、環境の悪化（例えば、生息できる鯨の最大数が半減）、突然の大量死（資源量が半減）などの不測要因があっても資源が枯渇しないことが、ＲＭＰの開発過程で確認済。
　なおかつ、通常、６年ごとに再計算を行うため、不測の事態が生じても資源の持続性は確保。

３　ＲＭＰでは、通常、６年ごとに最新データを取り込み再計算。

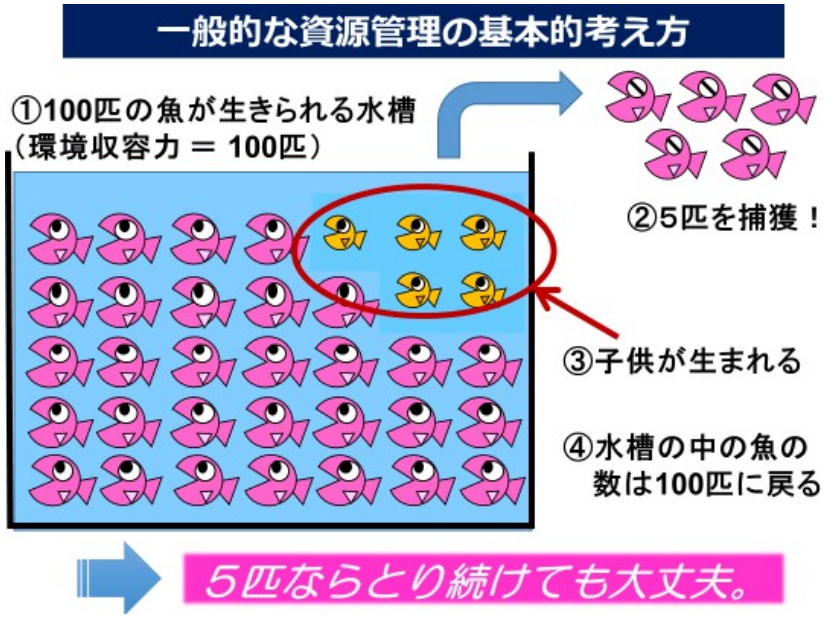
１．ＲＭＰの目的

ひげ鯨類の捕獲可能量を計算するための計算式を含む手続きを定めたもの。1992 年にＩＷＣ科学委員会で開発され、1994 年にＩＷＣ総会で採択された。

２．ＲＭＰの特徴

ＲＭＰの本質は、100 年間資源に悪影響を与えない科学的かつ保守的な算出とシミュレーション。

（１）資源管理においては、ある程度までの資源を持続的に利用（捕獲）することが可能。（これにより、再生産を促進。）



（２）ＲＭＰでは、以下のプロセスにより、極めて予防的かつ控えめな捕獲可能量を算出する。

① 推定資源量と過去の捕獲量から、捕獲可能量を算出する。

② 様々な不確実性（推定資源量、系群構造や自然増加率等の想定が誤っている可能性）を勘案し、膨大なシミュレーションを通じて、100 年間捕獲を続けても資源に悪影響がないことを確認する。

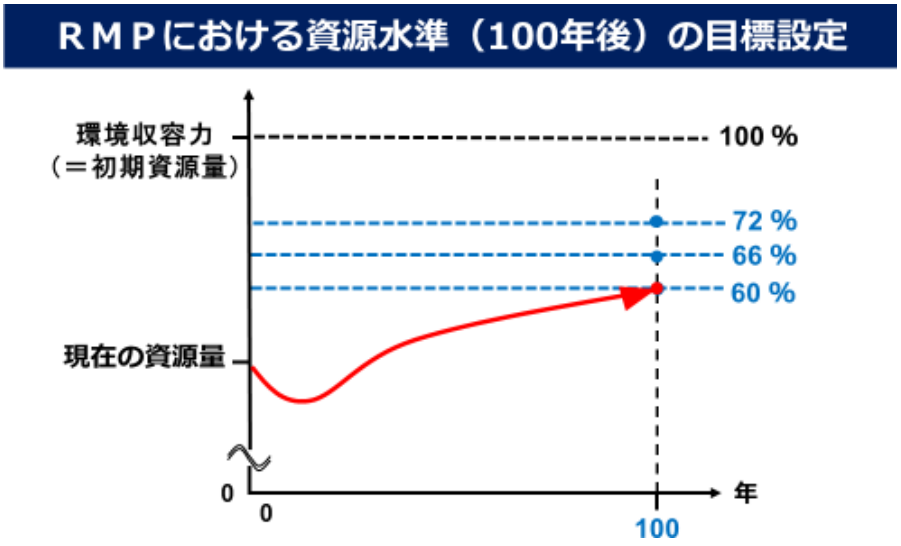
（３）100 年後の資源水準の目標として、ＩＷＣ科学委員会が以下の３つの選択肢を提示。いずれも十分に保守的な目標。

① 初期資源量の７２％

② 初期資源量の６６％

③ 初期資源量の６０％

※ 初期資源量：捕獲開始前の資源量

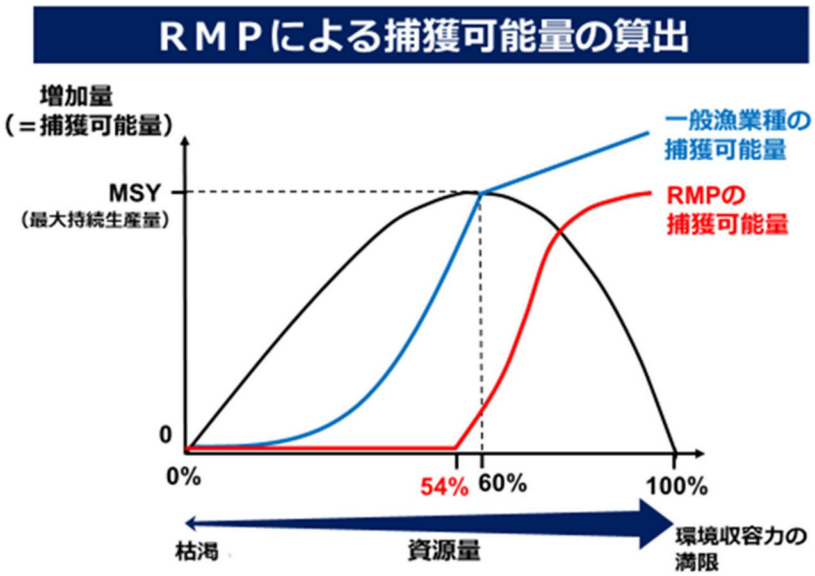


（４）さらに、以下のように、極めて保守的な仕組み。

① ＲＭＰで算出される捕獲可能量は、推定資源量の１%未満。
　日本沿岸の他の水産資源に適用される算出方法の場合、漁獲可能量は推定資源量の３～30%程度。

② 資源量が初期資源量の 54%を上回っている場合にのみ、捕獲可能量の算出が可能。
　一般的な商業漁業の対象魚種にＲＭＰを適用すると、ほとんどの魚種において漁獲可能量はゼロ。

③ 100 年の間に、捕獲以外に、環境の変化（例えば、生息できる鯨の最大数が半減）、突然の大量死（資源量が半減）などの不測要因があっても資源が枯渇しないことが、ＲＭＰの開発過程で確認されている。
　なおかつ、通常、６年ごとに再計算を行うため、不測の事態が生じても資源の持続性が確保される。



３．今後の調査・研究

（１）ＲＭＰでは、通常、６年ごとに最新データを取り込んだ再計算を実施。

（２）このため、

①　目視調査による資源量推定値の更新

②　鯨類科学調査や商業捕鯨で収集した生物学的データの解析、

③　バイオプシー調査による系群構造の解析

④　衛星標識調査による季節的回遊パターンの解明

等を進めていく。